教育未来創造会議
ワーキング・グループ
第９回議事録

教育未来創造会議担当室

教育未来創造会議
ワーキング・グループ（第９回）
議事次第

令 和 ５ 年 ４ 月 ４ 日
16 時 00 分～18 時 00 分
文部科学省第一講堂

１．　開会
２．　第二次提言（素案）について
３．　閉会

（配付資料）
資料１　　コロナ後のグローバル社会を見据えた人への投資について
　　（第二次提言）（素案）
資料２　　参考資料集
資料３　　参考データ集
資料４　　有識者構成員資料
資料５　　戦略的な留学生交流の推進に関する検討会とりまとめ　概要

○清家座長　それでは、定刻になりましたので、ただいまより、第９回「教育未来創造会議ワーキング・グループ」を開会いたします。

皆様方におかれましては、御多忙の中、御出席を賜り、誠にありがとうございます。

本日、永岡大臣、簗副大臣、伊藤政務官に冒頭より御出席いただいております。

また、オブザーバーの自由民主党教育・人材力強化調査会の柴山会長は遅れて参加されると伺っております。そして、公明党教育改革推進本部の浮島本部長には冒頭より御出席いただいております。

加えて、文部科学省の関係部局からも御同席いただいております。一部遅れて出席される方もいらっしゃいますが、定刻ですので会議を始めます。

それでは、議事に入ります。

本日は、文部科学省において開催しております戦略的な留学生交流の推進に関する検討会の取りまとめにつき、まず御報告をいただき、その後、第二次提言の素案について御論議をいただきたいと存じます。

まずは、資料５、戦略的な留学生交流の推進に関する検討会の取りまとめにつきまして、同検討会の主査を務められております髙橋さん、及び文部科学省より御説明をお願いいたします。

○髙橋構成員　それでは、私が主査を務めておりました、文部科学省の「戦略的な留学生交流の推進に関する検討会」の取りまとめについて御報告いたします。

本検討会は、平成25年に当時の検討会により示された外国人留学生の受入れの戦略をベースにしつつ、今回は、日本から学生を留学に送り出すことや、大学間の交流も含めて、今日の世界や日本の状況を踏まえて、留学生交流の受入れも含めての意義や地域・分野ごとの戦略等について議論を行ったものです。関係の深い省庁や団体、大学、そして、自治体からヒアリングを行いながら、昨年11月より、８回にわたり検討会を開催いたしました。

検討会では、留学生交流が、多様な価値観を持った者が共に学び、協働することで新たな価値が創出され、世界にイノベーションが生み出される活動であるということに着目して議論を進めてまいりました。その上で、留学生交流は各国の市民が信頼、理解し合う関係をつくり、日本と世界の平和と安定へ貢献するものであるとともに、世界から集まる留学生と切磋琢磨する環境をつくることによる高等教育の強化や、国際的に開かれた日本社会の実現など、今日的に極めて重要な意義があることを皆で確認いたしました。

検討会では、留学生交流は長期的観点から多様な地域や分野において進めることが重要であることを前提にしつつ、今日的な状況の下、戦略的に進める必要性の高い分野や地域についても議論いたしました。

また、日本人留学生の海外留学、とりわけ大学院レベルでの質の高い、そして、より長期の留学の促進や戦略性を持った外国人留学生獲得の強化、さらに、留学生交流を支える大学の国際化の今後の施策の方針についても提言させていただきました。

この中で出た重要な意見も後で紹介したいと思います。一つは、JASSOの海外留学の奨学

金に関するものです。日本国籍の者や永住者のみならず、正規生であれば外国人留学生がプログラムに参加する場合も支給可能にするべきだといった意見も出てまいりました。、これも含めて、取りまとめの詳細につきましては、文部科学省の池田局長から御説明をお願い申し上げます。

○池田高等教育局長　文部科学省の高等教育局長の池田でございます。

大きな方向性は、今、髙橋主査から御説明のあったとおりでございますが、具体的に資料５に沿って説明をさせていただいてきます。

なお、この検討会には髙橋構成員、池田構成員にも御参画いただきまして、未来会議での御議論と整合性を持って、連動させていろいろ御議論をいただいてまいりました。

資料は大きく分けると３点ございますが、まずⅠの部分、留学生交流の意義・目的でございます。全体の意義・目的は１に記してありますが、これは未来会議での御議論とも軌を一にするものであろうかと思います。２と３のところで少し具体的に申し上げますと、受入れのほうの意義・目的につきましては、これまで重視されてきた諸外国との相互理解の増進や、将来の高度外国人材の獲得などが引き続き重要な意義を持つということが改めて確認されております。

それから、３の日本人学生の留学のほうの意義・目的につきましては、世界で活躍する人材、あるいは国際社会の一員として地域社会の活性化や我が国の成長を支える人材を育成していくためには、日本人学生が積極的に海外に留学するということが不可欠だという前提に立ち、これまではどちらかというと１か月未満の短期の留学が大半を占めておりました。これも将来の本格な留学につながるという意味では非常に重要ではありますけれども、これは引き続き推進しつつも、大学院レベルでの長期留学など、より高度で専門的なプログラムの履修を伴う留学ももっと推進すべきとの御議論がございました。そうした意義も強調しながら、このⅠのところはまとめております。

それから、Ⅱの具体的な地域あるいは分野の具体的な戦略でございますけれども、まず分野につきましては、資料５の真ん中辺の左側にございます。大きく分けて３点でございます。留学生交流を進める分野は、基本的には各地域の状況や特性を踏まえつつ、各大学等の方針や学生本人の意向も前提に推進される面がございますけれども、一方で、政策的観点を持って交流を進めるという観点からここにまとめております。

具体的には①～③にありますように、地球的規模の課題など、我が国が課題解決に主導的な立場で取り組みたい分野として環境や農学などを挙げてございます。

②としては、国際的な頭脳循環のネットワークへの参画が特に望まれる分野ということで、これは国家戦略等を踏まえ、バイオ、AI・情報や半導体などを挙げてございます。

③として、経済社会の構造変革や持続的成長、イノベーションの推進で特に振興が求められる分野としては、文理融合やSTEAM、DXなどが挙げられております。

真ん中辺の右の地域戦略につきましては、留学生交流の推進に当たりましては、幅広く多様な国や地域から学生や大学間の自由な連携を進めていくことが重要だという認識の下、

検討会では、この前提の下に、今日的に特に言及すべき必要性の高いものについて明確にしていただいたところでございます。したがって、ここで明示的に出ていない地域・分野等についても、多様性の確保といった観点から、留学生交流を推進することは引き続き重要であるという点に留意しながら議論をしていただきました。

具体的には、世界経済を牽引する成長センターへ発展した東南アジアは、教育研究の観点でも存在感を増しており、今後、留学生交流を強化する必要があるという方向性が示されております。

また、地政学的要衝で高い経済成長を続けている南西アジアのうち、特に各国による人材獲得競争が激化しているインドにつきましては、我が国がこれまで十分に留学生を取り込めていない国でもありますので、受入れの抜本的な強化が望まれているということが記載されております。

また、世界トップ水準の研究大学など、教育研究力の高い大学が多く存在するG7を中心とした北米や欧州とも、大学との交流を軸とした留学生交流の強化が求められているということにも触れていただいております。

こうした戦略に基づき、一番下の今後の施策の方向性につきましてもおまとめいただいております。まず、先ほど髙橋主査からもお話のありました、留学生受入れのため、JASSOの情報収集や戦略立案機能の強化によって、戦略性を持った留学生の獲得をすることや、先ほど御説明した地域・分野の戦略を踏まえた奨学金の充実等が示されております。あわせて、安全保障貿易管理の徹底や研究インテグリティーの推進、留学生の受入れに当たっての留意点につきましても言及されております。

それから、Ⅲの２のところでございますけれども、先ほど申し上げたような学位取得型の留学や大学院レベルの交流、単位取得等の留学の促進など、留学への機運醸成や奨学金の拡充を行いながら、中長期以上の留学への重点化、質をより重視した重点化を図るということとされております。

最後、一番右下の３の大学の国際化でございますけれども、留学生の送り出しや受入れのこの基盤となるのは、やはり大学そのものの国際化、基盤の強化でございますので、そういった観点からの御議論をいただきまして、ここでは大学の国際化のため、外国語による授業の充実や留学生と日本人学生が共に学ぶ授業の実施など、国際通用性のある教育の展開のための支援、あるいはG7やASEAN等の国・地域にある大学とのネットワーク構築のための支援の必要性について言及をされております。

文部科学省としては、この検討会で取りまとめていただいた内容や、この未来会議の提言も踏まえまして、今後、これを着実に実行に移すべく、しっかりと取り組んでまいりたいと思います。

以上でございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ただいまの説明につきまして御質問等がございましたら、挙手をお願いしま

す。オンラインから参加の方は挙手ボタンを押していただければと思います。

いかがでございましょうか。

では、村上さん。

○村上構成員　御説明ありがとうございました。

２つ質問がございます。

第一に、現状では、分野によって外国人留学生の割合や日本人学生の海外派遣の割合に差があります。そういう相対的に国際化が遅れている分野の推進については、検討会ではどのように議論されたのかということが一点。

それから、２点目は、資料５に書かれている分野や地域の特性や戦略的重要性に関する認識の根拠は、この概要ではなく、取りまとめの本体に書かれているという理解でよろしいでしょうか。

○清家座長　それでは、これは池田局長、お答えいただけますか。

○池田高等教育局長　ありがとうございます。

１点目につきましては、やはり国・地域によって受入れや派遣について様々な状況がございますけれども、これは個人の勉強したいあるいは研究したい分野、あるいは大学間で特に交流をしている分野があったり、あるいは外交的な観点からこれまで多くなっている分野はありますけれども、そういったことも含めて、これまであまり交流が進んでいないところはしっかりと進めるとともに、これまでやや手薄であったインドなどは今回特に強調して書かれている。そういった議論の下に今回の戦略をまとめていただいております。

それから、この一枚紙はあくまで概要でございまして、本体ではもう少し具体的に地域ごとにきめ細かなことを書かせていただいているということでございます。

○清家座長　村上さん、よろしいですか。

○村上構成員　はい。

○清家座長　それでは、ほかに御質問、御意見はございますか。よろしゅうございますか。

ありがとうございました。

それでは、次の議題に移ります。事務局より、資料１の第二次提言の素案について御説明をお願いします。

○瀧本担当室長　それでは、失礼いたします。

事務局から、資料１の第二次提言素案につきまして簡単に御説明をさせていただきます。

この提言素案の作成に当たりましては、１ページの目次を御覧いただきますと、論点整理と異なるところは、「はじめに」、それから、２ページ目で「おわりに」というのを付け加えた以外の構成上の変更はございません。

それから、３ページの「はじめに」のところは経緯を端的に紹介したものでございまして、４ページ以降、前回の会議での発言後、関係省庁とも調整をしつつ、皆様の意見を可能な限り随所で反映させていただきましたほか、具体の事業名など記述の具体化、あるいは分かりやすさの観点から整理をさせていただいたところでございます。

また、このほか、16ページの一番上のところに「４．地域・分野の戦略」というものがございます。この部分は新規として加えさせていただいたものでございます。この箇所は全体の構成上、今後の方向性の中の考え方を示すものですが、４ポツの３行目の終わりのほうにございますが、文部科学省の戦略的な留学生交流の推進に関する検討会、先ほど髙橋構成員、池田局長から御説明のありましたこの検討会において、地域や分野の特性等に鑑みてというこの内容をまずは頭出しをさせていただきました。最終的に検討会の報告書の内容も踏まえて記述の充実を図ることができたらよろしいかと思って考えているところでございます。

また、同じ16ページの「５．指標」、その下の（１）日本人学生の派遣関係の下にワンパラグラフ、ここは追記をさせていただいたところですが、前回の論点整理までは、そのすぐ下にございます具体の指標を例示として書いていただけでございますが、その例示の根拠、例えばこのパラグラフの中ほどから、高等教育機関在学者当たりの入学者数の割合が非英語圏のドイツ及びフランスと同等の水準となる15万人。これは長期留学者ですが、15万人を目指す。あわせて、中短期、高校の留学生も云々と書かせていただいた上で、パラグラフの最終行で日本人学生海外留学者数全体で50万人を目指すという50という数字も明記させていただきました。

次の17ページの（２）の後も同様に、その下に書かせていただいた指標の数の意味するところを少し説明書き、ないしは前書きとして加えさせていただいたものでございます。

この17ページの（２）の後の約10行の記述の特に後半ですが、学部生数に占める留学生の割合をOECD平均と同等の水準、加えて、博士課程に占める留学生の割合が世界トップレベルの大学がある国の平均と同等の水準とする。その結果、全学生に占める留学生の割合がドイツ、フランスと同等の水準となることを目指すといった説明的な、数字の意味するような内容も書かせていただいた上で、高校段階での大幅な増を図ることにより、外国人留学生の受入れ数40万人を目指すという40という数字も加えさせていただいたところでございます。

それから、ページをおめくりいただいて、19ページからが具体的な方策という第４章といいましょうか、ございます。

一言だけおわびをさせてください。構成員の皆様に昨日までに事前に送らせていただいたファイルで、19ページがデータ上、空白、ブランクになっていたようでございます。もし事前に打ち出してチェックされていたりすると、この後ページがずれてしまいますが、本日のディスプレイで示させていただいているものやお配りした資料はブランクを解消して、第４章からが19ページとなっておりますので、この点、事務局からおわびを申し上げたいと思います。

19ページからの具体的方策ですが、中ほどから下の点線が入った中に＜具体的取組＞という見出しがございます。論点整理のときまでは検討の方向性ということで事項的に書いておりましたけれども、今回、提言素案ということで、具体的取組として、それぞれの項

目、例えば１つ目のポツで広報強化を図るとか、あるいは３つ目のポツで推進をするといった文章化をしつつ、物によっては具体化をさせていただいているところでございます。

同じ19ページの今申し上げた①の上から５つ目の単位認定を伴う中長期留学あるいは学位取得を目指す学生への経済的支援の充実（奨学金の充実）を図るといった部分については、構成員の皆様からも様々な御意見を頂戴しておりましたが、現時点では論点整理とほぼ同じ表現とさせていただいております。

続きまして、少し飛びますが、21ページをお開きいただけたらと思います。

21ページの下から２つ目のポツ、見出しに「国費留学生制度については」とあります。ここについては、前回までもう少し抽象的な要素を書き出してございましたけれども、その後の議論も踏まえて具体化をさせていただいているところです。特に先ほどの戦略検討会も踏まえて、４行目から、地域を重点化するなど、時代に即した戦略性を持って見直しを進めてるといった点でございましたり、さらには、運用面でも様々なペーパーレス、オンラインなど、優秀な学生の確保を視野に入れた手続の柔軟化などについても、具体的に国費留学生の見直しの方向性として提言素案の段階で具体化させていただいたところでございます。

また、飛びますが、25ページの中ほどに③として在留資格制度の改善がございます。25ページの真ん中ほどの③関連する在留資格制度の改善です。ポツが４つになりまして、１つ目のポツは特別高度人材制度等を法務省さんで検討した結果の内容。さらに、２つ目のポツは、専門学校卒業者に対する在留資格の運用の見直し等について、より具体的に書き下しをさせていただいた内容でございます。

このような形で、論点整理から提言素案に移行する中でできるだけ全体的に記述を発展させたところでございますが、委員の皆様におかれましては、本日のワーキング・グループがこの案文の改善に向けて実質的な意見を頂戴できる最後の機会になりますので、さらなる御意見、改善意見等、何度でも積極的な御発言を頂戴できれば幸いでございます。

なお、資料１ではございませんが、本日、資料４として東北大学の大野構成員とオンラインで参加いただいている湯﨑構成員から資料をいただいておりますほか、廣津留構成員とオブザーバーの柴山会長から机上の資料という扱いで配付資料を頂戴しておりますことを申し添えさせていただきます。

事務局からは以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、ただいまの説明につきまして、質問のある方は挙手をお願いします。また、オンラインで御参加の方は挙手ボタンを押していただければと存じます。

いかがでございましょうか。

では、廣津留さん。

○廣津留構成員　廣津留すみれです。

御説明ありがとうございます。

これから細かい提言の文言などについての御発言等があると思うのですけれども、その前に、今日ちょうど戦略的な留学生交流の推進に関する検討会のお話もありましたことと、素案の20ページにあります留学生派遣の具体的取組の中の英語キャンプ、海外派遣などのお話に沿いまして、１つ資料を提出させていただきました。提言まとめ後に施策をデザインなさる際に何かお役に立てればと思いまして、10年前、私が大学１年生のときに始めたSummer in JAPANという英語セミナーなのですけれども、昨年10年目を迎えまして、こちらについて少しだけお話をさせていただければと思います。

この一般社団法人Summer in JAPANは2012年に設立いたしまして、私の地元、大分市で大学１年生のときから毎年夏にサマーキャンプを行っておりまして、ハーバード大学をはじめとした現役大学生から応募を募りまして、そこから選抜された約10名が日本の小中高生を対象に２週間のサマーキャンプを行っているものです。

2020年からコロナでオンラインに移行したため、今回は2019年の資料を御用意させていただきました。

資料については、１ページ目に細かい数字と、それから、年の参加者のプロフィールとしてワークショップの内容などがあるのですけれども、特徴としては、高校生からだけというキャンプはかなり多いのですけれども、そうではなく、小学生から参加可能で、学年で内容を分けることなく、レベル別で分けております。学校のカリキュラムというのは年齢で分けているのですけれども、皆さんの学びたい意欲ですとか学びたい内容というのは学年、年齢で変わりませんので、そちらを優先してレベル別で分けています。

また、ハーバード生が日本語をしゃべれないので当たり前なのですけれども、全て英語で授業を行って、英語の環境で２週間過ごすということになっております。

また、海外で学び、仕事をするに当たって確実な強化が必要なロジカルシンキング、クリティカルシンキングを鍛えるために、ライティングのセミナーを強化的に実施しております。ほかにもプログラミングですとかプレゼンテーションのスキルのワークショップなどもあるのですけれども、ライティングは必須として行っております。

あとは、授業だけでなく、大学生活の生の声をプレゼンして、実際の留学生活のイメージをしてもらうことなどが特徴としてありますけれども、特に今回の提言の内容に合わせて実施していただけることとして数点申し上げたいことがございます。

まず一つは、参加者の多様性を重視することです。Summer in JAPANに参加する大学生の中には、LGBTQの方もいれば、毎年世界20～25か国からの参加者もいらっしゃいますし、また、義足の方など、本当にいろいろな多様性を持った学生の皆さんがいらっしゃいまして、また、専攻も全く違う。例えば生物の勉強をしながら音楽がすごく得意な方がいらっしゃったり、これからこのグローバル社会で活躍するというところで必要なこととしては、やはり学校での勉強がただただ大事なだけではないということを伝えたくて、私がヴァイオリニストをしているということもあり、毎年コンサートシリーズを行って、学生の皆さんに実際にステージに上がっていただいて、実際にほかにどのような得意分野があるか、こ

れからは個の時代ですので、それぞれどのような特徴があるのかというのを分かっていただくために、そのようなイベントのシリーズも行っているのですけれども、そんな環境の中で自然と生活することで、多様性を肌で理解することができるというのがこれからの時代に大変大事かなと思って行っております。

２点目は、高校生や大学生をスタッフとして入れることです。参加した学生は直接海外の大学生とつながることにより、留学意欲も芽生えますし、海外志向が上昇します。参加のもちろん小中高生だけではなくて、副次的な効果として、スタッフとして実際に海外の大学生とつながることで、例えば日本の就職状況、就活の情報を海外の学生の方に直接伝えることもできたりということが実際にこれまでの参加者の中で情報交換ができておりますので、そのように直接つながることが大切かなと思います。

３点目として､対象年齢をなるべく下げるということです｡先ほども申しましたように、高校生からのキャンプというのは大変多いのですけれども、小学生が参加できるキャンプというのがあまりなくて、ただ、文科省さんも高校生の留学を推進されているということをお聞きしたのですけれども、やはり小学校低学年の時点から海外の目線を身につけられるように、高校生以前の段階で参加できるプログラムをデザインすることはかなり重要だと思っております。うちのように小中高生を全員同じプログラムに入れる必要は必ずしもないかとは思うのですけれども、早めに海外に目を向けるためには、小学生、中学生に向けたプログラムも必要かなと思います。

４点目なのですけれども、参加地域を広げるということで、私は地元が九州の大分ということもあって、地元の大分に皆さんが集まってくるようなプログラムにしているのですけれども、本当に大分のように、地方ではやはり自分の経験から言っても、ロールモデルですとか実際に留学している先輩というのが少ないので、どうしても情報がかなり少なくなってしまいます。なので、こちらからアプローチをしていかないと、なかなか海外という発想も湧きにくく、やはり地方ですと都会のお金持ちだけが留学できるのだよという発想もかなりまだ強いので、これを取っ払うためにもアクセスを広げることが必要かなと思っております。

オンラインももちろんいいのですけれども、私がコロナ中にオンラインに切り換えを行って実施した正直な感想というのは、やはりオンラインの限界を感じたのも事実でして、うちは大分市とか国東市など自治体と共同でワークショップも行っているのですけれども、そのように地方に働きかけることもこれからデザインする上で重要かなと思います。

細かい数字などは資料を御覧いただければと思いますけれども、コロナ前、2019年には受講生だけで115名が参加しまして、ハーバード大学、スタンフォードほか、アメリカの４年制大学から12名が大分に来てこのようなワークショップを行いました。SIJは海外大学とのコネクションや英語セミナーの実施のテンプレートなどもありますので、もしこれが何かのお役に立てればと思いまして、今回資料を共有させていただきました。

以上です。ありがとうございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、平原さん、よろしくお願いします。オンラインからですね。

○平原構成員　ありがとうございます。

本日、ワーキング・グループとしては最後というところで、私のほうからスクリーンシェアをさせていただきますので、皆さん、画面のほうを見ていただけたらなと思います。

まず、本当に今日、最後のワーキング・グループですので、皆さんと出会えた御縁に感謝ということで、感謝の気持ちをお伝えしたいなと思っております。

本日、私のほうからお話ししたいことは全部で４点ございます。

まずは全体に対しての論点なのですけれども、１点目は、８歳で４か国に単身留学をして私自身が感じたグローバル教育において必要なこと、海外に行った日本人留学として感じたことをまずお伝えしたいなと思います。

２点目といたしましては、日本への留学意欲がある外国人の留学生の方の立場になって考えたときに感じた情報の壁です。こちらも共有させていただけたらなと思います。

３点目といたしましては、学生にとって一番近い存在である先生方に必要な思考の転換というところです。

最後、この３つを踏まえて、私が今できることというのを御提案させていただけたらなと思います。

まず１点目のお話です。

先ほどのお話にもありましたけれども、お金持ちだけが留学に行けるとか、すごく意欲がある人だけが行けるとか、そういう留学に対するハードルとかイメージがあると思うのです。

私自身、1993年に生まれて、何とひとり親で生まれました。平原依文という名前なのですけれども、母が文子という名前で、文子に依存するということで依文という名前をつけてくれました。血のつながらない父と事実婚をしまして、この片親で生まれたというところと事実婚の父というのが原因で、私、保育園のときからすごくいじめられました。周りに存在を消されました。目もくれませんでした。

そんな中、小学校に入ってもいじめが続いたのですけれども、小さいときの写真がなくて、大きいときの写真になるのですけれども、ある中国人の女の子と小学校１年生の２学期のときに出会って、公立の学校に彼女の御両親は出稼ぎに日本に来て、彼女はその学校に来ていたのですけれども、最初、彼女はすごくいじめられていたのです。ただ、いじめられても、いじめられても、とにかく勉強熱心で、とにかく周りとコミュニケーションを取ろうとしている彼女の強さにすごく惹かれました。

彼女に言われたのが今でも残っているのですけれども、中国人ではなく、一人の同級生として私のことを見てほしい。あなたと同じ学生ですと言ってくれて、そんな彼女の強さに本当に私は惹かれまして、自分探しのために８歳のときに一人で中国の公立の学校に入学しました。中国の次にカナダ、カナダの次にメキシコ、スペインといろいろ行って、ど

の国に行っても、最初はシャープの電子辞書を片手に行って、何も知らない中で毎回学校探しを始めるというパターンで留学生活をしていたのですけれども、何一つ分からないまま、学ぶこともとても多くて、何でそれができたのかなと思うと、今この写真の中に写っている一人一人、今でも毎日連絡を取り合うような中で、この子たちと何で友達になれたのかなと思うと、やはり枠ではなくて軸として心のつながりがあったからこそ、国という境界線が溶けて友人、友達になれたのかなと思いました。

そんな中、いろいろな留学に行って私が感じたグローバル教育において重要なことは、大きく分けて４つあります。

１つ目がどう話すか。文法であたり、もちろん言語だっていろいろあります。でも、それ以上に何を伝えたいかが重要であると思います。日本語でも同じです。どんなにきれいに話しても、自分がそう思っていなかったら相手に伝わらないと思うのです。

なので、何を伝えたいかがすごく重要で、あと、いろいろな国に行って、文化だったり、宗教だったり、前提は人によって全く異なるので、相手の視点に立って物事を考える力ですね。以前、マイノリティー教育といった言葉も出ましたが、そういったような教育も必要なのかなと思っております。

あと、当たり前は存在しないからこそ、何事も「なぜ」からというような感じ方、考える力というのもグローバル人材において必要かなと思っております。

最後に、やはり今の社会情勢はいろいろなことが起きておりますが、地球課題を自分事化できるような教育ですね。そのためには、枠ではなくて軸で対話するような力を教育を通じて醸成していくことがすごく重要なのではないかなと思いました。

今、留学生、留学経験がある私の視点でお話しさせていただきましたが、次に、今、日本に興味があるけれども、日本の留学を調べてみようかなどと思ったときに、Googleでいろいろ調べてみました。その際に、やはり情報が、例えばJapan study abroadと調べると、文科省さんから出ている情報が一番上にすぐ出てこなかったりするのです。外務省から出ている情報が一番先に出てこなかったり、こういったようなアメリカのサイトで提供されている情報が出てきたり、情報も本当にいろいろな情報が混在していて、どうやったら日本に留学することができるのかなというのが、正直、留学生の視点に立って調べたときに分かりづらいというのがあります。

それに対して、海外の留学国として人気のニュージーランドだったり、フィンランドだったり、カナダとかはどんなサイトを国として、政府として運営しているのかというのを見ていくと、これはニュージーランドのサイトになっております。まず、どうやって調べるか。どこの学校へ行きたいのか、こういうことが学べますよというのが書かれています。最後に、留学に行くためにまだ不安なことがあれば、誰かと話したいのか、それとももっと情報が欲しいのかとか、それが政府のサイト上で分かるというのが、ニュージーランドもそうですし、フィンランドもそうですし、オーストラリアもそうですし、カナダもそうですし、いろいろな留学生に人気のある国ですね。それらの国が戦略的にこういったサイ

トだったり、Googleで調べて、必ずこういった政府のサイトが上に来ることが分かったので、それが一つ課題としてあるなと思いました。

３点目に関してです。これは先生の教育です。私はよく総合的な探究の時間で授業をさせていただくことが多いのですけれども、この中で従来の先生方が「教える」から「ファシリテーターとなる」というようなことが書かれておりました。ここです。先生はファシリテーターに徹するとか、いろいろある中で、やはり先生は全部答えを求められている、あるいは全部答えなければと忙しいと思うのです。

では、先生の定義をどういうふうに変えていったらいいのか。先生たちの思考の転換をどうやって持っていけたらいいのかと思ったときに、これはフィンランドの先生に求められている要素です。見ていくと、私はこれはすごくいいなと思いました。フィンランドの先生方はクリエーティブで、自立した思考の人たちが先生になれますよと書かれていて、こういった思考の転換を日本の先生方も体験できるともっといいのかなと思いました。そのためにも、先生方が実際に海外にもっと留学して行ったり、あるいはグローバルな教育を受けたりしていくと、もっと先生方の思考も変わって、よりよいグローバル教育の醸成につながるのではないかなと思いました。

最後、私たちが今できるところということで、幾つかあるのですけれども、これはそれこそ柴山さんが提出されていた資料の中で見つけたJapan Virtual Campusです。こちらのキャンパス上で日本の教育を世界に伝えていくような授業をもっともっと充実させていったり、あるいはAnime festivalとGoogleで調べると、物すごい量のAnime festivalが世界中で開催されているので、こういったところで、例えば大学だったり、高校だったり、日本政府がブースを持って、日本で留学できますよとか、そういったこともできるのではないかなと思いました。

あと、以前もお伝えしました、私も参加した青年版ダボス会議という高度人材の皆様が集まっているサミットで、教育機関であったり、政府がブースを持って出展して、そこで誘致につなげていく。そういうこともできるかなと思いました。

私個人といたしまして、会社としてやっていることは、こういった「旅して学ぼう、考えよう！　世界のSDGs」みたいな授業をJTBさんと一緒に提携して、学生さんたちの総合的な学習の時間だったり、修学旅行のオンライン授業として提供していったりしておりますので、こういったような世界を遠くに感じさせないような取組をやっていったり、あるいは世界の国際的なサミットとかで日本のプレゼンスをもっと出していく。サイトとかももう少し工夫して分かりやすく、外国人留学生向けにサイトをアップデートしていくと、より情報格差だったり、経験格差が少なくなるのかなと思いました。

私からは以上となります。すみません。長くなりました。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、やはりオンラインから湯﨑さん、お願いします。

○湯﨑構成員　ありがとうございます。

紙で資料を提出しておりますので、それを御覧いただきながら話をさせていただければなと思うのですけれども、まず全体として、こういう最終段階として、かなり豊富な御意見があったと思うのですが、取りまとめをしていただきまして、大変感謝を申し上げます。

その上で何点かあるのですけれども、まず、日本人学生の海外派遣について、先ほどの御説明のときにも若干言及があった経済的支援の充実のところですが、これもどういう戦略的な目的なり戦略的な目標に対して、どういうことをやるのかということにもよるのですが、特に恐らく高度人材とか頭脳循環とか比較的高度なところでは、アメリカとかイギリスといった有名大学に行くことが多くなると思うのですけれども、今、非常に費用が多額で、今の給付型の奨学金制度では十分ではないと思います。それから、無利子の貸与型というのも、年間1000万とか千数百万とかかかるわけですよね。それを２年間行くので、300万とかの借金を負うことになって、とても返済できるようなものではない。海外企業に就職して、卒業してからいきなり2000万とか3000万の給料をもらいますということになればできるかもしれないのですけれども、日本に帰ってきて活躍しようとすると、今の企業の給与システムではとても返済もできない額です。特に恐らくトップ人材がターゲットとなるとは思うのですが、奨学金制度の充実についてしっかりと検討して、端的に言うと、かなり額をアップした奨学金を給付するというようなことも必要ではないかなと思います。

それから、外国人留学生の受入れについてですけれども、この中で、今日文科省のほうの御報告もあったので、そういう形で進めればいいのかなというのは今日理解しました。いずれにしても、受入れ地域、それから、分野もありましたけれども、その両方をクロスさせながら優秀な外国人の受入れを促進するということが必要であろうと思います。

それから、これは留学生の派遣・受入れ両方なのですけれども、企業等の財政力というのをもっと活用するべきだろうと思っていまして、冠奨学金だとか、あるいは冠講座で外国人を採用して、これは国際化ということにもつながりますけれども、そういう形での連携もするべきではないかなと思います。

それから、工程表なのですが、今日、平原さんあるいは廣津留さんから具体的なこういうところが重要ではないかという御提言もありました。そういったところは具体的にしていくということで非常に重要で、それがないとなかなか本当の意味で進んでいかないと思います。そのために、今は施策の方向性とか指標とかになっていますが、今後、工程表を作って、実際に具体的に本当に何をするのかというアクションをしっかりつくるということが政府の次のステップとして本当に重要だと思いますので、それをぜひお願いしたいと思います。

以上は若干ジェネラルなコメントになるのですが、次のページを御覧いただきまして、細かい具体的な修文案をいくつか入れております。

まず、最初のパラグラフですが、ここで自分とは異なる価値観を持つ者と協働するということを、一番最初の前文のところに入れていただくのがいいのではないかなと。これは今、環境に適応するというようなことが書いてあるのですが、環境への適応はもちろん大

事なのですけれども、一番大事なのはやはり違う価値観の人と一緒に働くことができる、理解した上で働くことができるということなので、それを明記しておいたほうがいいかなと思います。

それから、細かい話なのですが、次のパラグラフの高校段階での留学者数、これはどういう留学者が対象になるかというのが少し明確ではなかったのですが、少なくとも３か月以上の留学というのを指標にするべきであろうと。そのときに、この数字が当てはまるのか、別の数字になるのかは分かりませんけれども、あまりにも短期のものは除外したほうがいいのではないかなと。というのも、広島県でも留学推進としたときに、１週間や２週間というのは結構あって、ほとんど物見遊山的な、旅行的なものになってしまっているものも、一部見られます。ちょっと二日くらい大学に行ってみますみたいなこともあったりするのですが、少し効果に疑問を感じるところもあるので、ここでは少なくとも３か月以上を対象とするべきかなと思っております。

それから、その次のパラグラフですけれども、外国人留学生受入れ方策のところに、このかぎ括弧で書いた「なお、外国人留学生の卒業後の定着・活躍が受入れの量的・質的拡充に資することに留意するべきである」と。つまり、出口のところをしっかりするということが入り口を増やすと。これが入口の質も量も高めることにつながるので、これは連動しているということを明記し、意識をしておく必要があるのではないかと思います。

それから、その次のところなのですが、このかぎ括弧の中に書いてあるような、その他の国の研究開発プログラムなど、他の施策との連動を図るという、これは途中段階で入っていたと思うのですけれども、私が意見を申し上げてですね。途中段階までは入っていたのですけれども、最後はなくなってしまっていて、これはやはり重要ではないかなと思うので、一応意見として復活を申し上げておきます。

それから、その次のパラグラフです。国際交流の促進についてというところなのですが、この中で、グローバル人材育成に資する拠点中等教育機関について、これは強化するという記述ではあるのですけれども、それについての留学生の受入れも支援するというのも明記していただけるとありがたいと思っております。

これは、具体的には広島県で今運営しております叡智学園という中高一貫校について、留学生の確保をいろいろなチャンネルを通じて実施するのですが、これはかなり大変で、今後、こういった学校が特に公立で増えていった場合、一校一校がそれぞれのチャンネルで展開をしていくのですが、それだけだとやはり非効率になるので、これも先ほど平原さんから御紹介があったような、国のウェブサイトでまとめてやったり、あるいは国と国との関係で高校生を募集するとか、そういったことがあると優秀な学生が効率的に確保できると思うので、こういう記述を入れていただければなと思います。

それから、最後のところです。先ほどの企業の貢献というところにも関わるところですが、そこのかぎ括弧にもあるように、高度外国人材活躍地域コンソーシアムというものをつくるのであれば、その中でやはりそこに参画する企業などから奨学金を提供してもらっ

て、その地域で使う奨学金というのをつくっていくのがいいのではないかなと思うので、それを記述してはどうかと思っております。

以上ですけれども、もし後で時間があったら、先ほどちょっと御紹介した叡智学園について、子供たち自身が作ったビデオがあるのです。それも御覧いただくと、一体どんなものなのかという具体的なイメージができると思うので、後ほどお時間があったら御紹介させていただきたいと思います。

以上です。ありがとうございました。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、大野さん、よろしくお願いします。

○大野構成員　ありがとうございます。

資料を出していますので、最終的にはそちらの御説明を差し上げたいと思いますけれども、せっかくこういうふうに御縁をいただいて、また、いろいろな意見交換ができていますので、私自身の背景も少しお話をさせていただきたいと思います。

私は、小学校のときにヨーロッパとアメリカに２年と１年いて、それから日本に帰ってきました。今で言う帰国子女の先駆けでありまして、日本に戻ってきたときに初めて跳び箱を飛ぶということで、なかなか苦労したり、ヘ長調で縦笛を吹きなさいと言われ、何のことだかよく分からなかったりというような経験もしました。両親が海外で働いていましたので、そんな海外経験もあったおかげで、大学院のときに、日本学術振興会の米国大学院派遣事業という１年間だけ授業料を負担いただけるプログラムに採用してもらいました。そのときのネットワークが私の研究者人生を非常に豊かにし、かつすばらしいものにしてくれたと思います。１年間大学院に行っただけだったのですけれども、今でもそのときのネットワークでやり取りをしていて、その後も何回か長期滞在はしましたけれども、ぜひ後進たちにもそのような素晴らしい経験をしてもらいたいと思って、今、様々な枠組みづくりの提言をしているということでございます。

実際に行かれるときには、経験は多様ですから、これだという決定打はなかなかないのですけれども、ぜひ多くの皆さんに国際、グローバル、多様性というものを実感してもらいたい。研究について言えば、私が主催していた研究室では派遣もし、多様な留学生の諸君を受け入れて内外にネットワークができておりました。日本の科学技術のビジビリティーというのが今下がっているということが言われていますが、私はその一つの大きな要因として、国際的なネットワークが非常に細くなり、いい研究をしても、その細いネットワークの先にいる人たちしか引用をしてくれないことがあると思います。

ここまでがグローバルは大事だという前置きでございまして、資料の説明をさせていただきます。

今、画面に映っている部分は、この素案の取りまとめが大変適切にできている、ありがとうございましたと述べています。

次のページをお願いします。

３点お話をさせていただきます。

日本人学生の派遣について、コロナの中で行きたいという学生諸君が減ってきています。その中でも、一定程度海外留学をぜひ経験したいと言う者がおりますけれども、その大半は経済的な負担があるために断念せざるを得ないという状況であります。民間から資金を頂いているトビタテ！留学JAPANは1,000名が対象ですけれども、加えて、返済も伴う有利子の奨学金を含めても留学のための支援制度は現在2.1万人であります。今回、18万人から50万人へ２倍以上の目標にしますので、政府による基金の創設や給付型奨学金の拡充など、財源の大胆な投入が必要です。これは最終的に受益者が社会全体だということを考えると、未来に投資をするのだということになろうかと思います。

次のページをお願いします。

もう一つは、今日も戦略的ということで冒頭に御説明がありましたけれども、戦略的な形で在留資格制度を設ける必要があります。高度な外国人人材の定着率の向上を目指して、在留資格制度の優遇措置が設けられたことはすばらしいことだと思います。今回の提言の中にも、国内大学の卒業生が同様の優遇措置を受けられるように検討するということで、これは歓迎するべきことだと思います。これはお金がかかることではないので、ぜひ実現していただきたいと思います。私たち大学が優秀な外国人留学生をリクルートしてくる、つまり、日本の大学に入ってごらんというためには、もちろん先ほどのお話にありました視認性のいいウェブサイトは絶対に必要なわけですけれども、自分のキャリアはどうなるのか、日本で卒業後は働けるのだろうかという予見可能性も重要です。日本の大学を出てビザが優遇される、就労ビザが優遇されるというところをぜひ盛り込んでいただきたいと思います。それによって優秀な外国人留学生が獲得できるのと同時に、定着もしていくということになるかと思います。

最後は指標について一言だけ、日本人留学生における学位取得等を目的とする長期留学者の数が出ていますけれども、これは海外の大学あるいは大学院に直接進学する者を一般的にイメージするのではないでしょうか。そうすると、誰が送り出すのか、誰がこの指標について責任を持つのか、なかなか日本の高等教育機関の関与のイメージがしにくいので、ここについては取り組むべき主体あるいは役割というのを明確にすべきかと思います。

私からは以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、オンラインから齋木さん、よろしくお願いします。

○齋木構成員　ありがとうございます。齋木でございます。

第二次提言素案につきまして、様々な議論を踏まえて適切におまとめいただきましたこと、関係の方々に心より御礼申し上げます。

その上で、３点意見を申し上げます。

まず１点目です。19ページから20ページにかけて列挙されています日本人学生の派遣方策に係る具体的取組についてですが、①の高校段階から大学院段階までを通じた日本人学

生の派遣の推進に関する具体的取組の一つとすべきか、あるいは②の初等中等教育段階における英語教育・国際理解教育、課題発見・解決能力等を育む学習等の推進に含まれる取組とすべきか、必ずしもよく分からないところもありますが、私として１つ、大変重要であると考えていることがございます。それは、日本が国際社会の一員であり、したがって、日本の平和、安定や繁栄は、世界の平和、安定や繁栄なくしては確保できないこと、及び日本はこうした面において国際社会において果たすべき役割が極めて大きいことに鑑み、外国に対する興味や関心を幼い頃から喚起し、国際問題を自らの問題として捉えさせるための取組が求められていることです。こうした取組は、高校、大学においても当然継続的に求められることですけれども、小学校や中学校のときにおいても、まさに一人ひとりの人間性の基礎を形づくるものとしてしっかり取り組むべき課題でございます。

19ページには教員の国際理解教育の指導力の強化がうたわれておりまして、それはそれでぜひそのような方向で推し進めていただきたいと思いますが、「理解」の前段階としての「興味、関心」という視点も忘れてはなりませんし、また、「理解」の先にくる「いろいろな問題を自分事として捉える」という視点が極めて重要と考えております。さらに、今申し上げたことは、教員の指導力の問題にとどまるものでは全くないということであります。すなわち、学校での学びの機会の充実は当然のこととして、加えて、地域コミュニティーなどをも通じたより広範な、かつ草の根レベルの活動の抜本的促進が必要であると考えております。

以上が１点目となります。

次に、２点目ですけれども、この観点から、22ページ、23ページに記載していただいております国際交流の推進が基本的には重要であると考えております。その具体的取組として、アジア高校生架け橋プロジェクトの充実強化などを通じ、高校生の国際交流を促進するとともに、対日理解促進交流プログラムの充実強化を通じて、海外少年の招聘等により国際交流を促進するとの提言がございます。大いに賛成です。こうした交流や派遣、招聘のプロジェクトやプログラムをさらに拡大､活発化していただきたいと思います｡加えて、第１点目に申し上げたこととも共通いたしますけれども、こうしたプログラムの対象を高校生に限定する必要はないわけでして、小学生や中学生なども含めて、日常的に世界に触れ、そして、世界に目を向ける、さらには、世界で起きている色々な事柄を自分事として捉える、そうした機会を多くの子供たちに提供していくことが重要であると考えております。

最後、３点目ですが、24ページに高度外国人材の定着率の向上の実現に向けて、産業界の役割が大きいということについて言及していただきました。大変同感致します。多様な人材が働きやすい職場の環境づくりについては、女性の活躍の観点からも様々な取組がなされつつありますが、外国人も含めた職場、そして、社会全体における多様性、包摂性が今、強く求められています。留学生として過ごした大学や大学院、また、日常生活を送る地域社会などにおいて、当該外国人がいたずらに疎外感を持つことのないよう、不断に改

善を行っていかなくてはならないと考えますが、特に受入企業が果たす役割には大きなものがあると考えます。ぜひ産業界としてしっかり取り組んでいただくようお願いしたく、そのための具体的仕組みなどについても、さらに工夫できる余地があると考えますので、具体的な取組として書き込めることがあれば、ぜひこの提言の中に記載していくようによろしくお願いしたいと考えております。

どうもありがとうございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、村上さん、お願いいたします。

○村上構成員　今回の第二次提言案は、前回のものと比べて、キープレーヤーである企業の役割や企業に期待される取組について記述が明確で豊かになっている点がよいと思います。

その一方で、16ページの「４．地域・分野の戦略」が今回新たに加わった点については、ここを独立させて強調すると、全体的にバランスが悪いように思います。「１．コロナ後の新たな留学生派遣・受入れに当たっての考え方」の中に今後戦略的に重点化すべき地域や分野を定めていくという内容を加えれば済むと思いますし、また、文科省の戦略的な留学生交流の推進に関する検討会の活動については、取りまとめが出ているようですので、10～11ページの「２．これまでの取組」の中で内容をまとめればよいと思います。

地域戦略は軍事、外交、政治、経済などいろいろあり、これが前面に出てくると、個人の幸せのための教育投資や未来を支える人材を育むといった教育未来創造会議の基本理念がかすんでしまうような印象を受けます。

次に、追加項目について提言いたします。留学生の派遣・受入れの具体的取組、もしくは教育の国際化の推進の具体的取組の中に、大学ごとの教育の国際化の進展に応じて教員数と職員の数を増やして対応するという内容の項目を加えるのがよいと考えます。数値目標を定めて、留学の派遣・受入れを大幅に増やし、教育の国際化も進めるという第二次提言案は、全体的にすばらしい内容になっていますが、大学がこれを実行するには多大な労力がかかると思います。

早稲田大学は日本で一番多く留学生を受け入れています。私は過去十数年の間に、学部生から大学院の博士課程の学生まで多くの多様な国籍の留学生を日本語と英語の両方で教えてきました。留学生の場合は、日本人学生に対するよりもきめ細かな指示やメンタルへの配慮が必要になります。推薦状を書かなければならない機会も多いです。また、早稲田は日本人学生の海外留学も活発で、彼らに対しても、場面に応じて一人に対して何通も推薦状を書いたり、帰国後は、海外で取得した単位が早稲田での単位に互換できるのか精査を行ったりと、教員がやらなければならない作業はたくさんあります。今後、派遣・受入れの数が倍増すれば、学生総数は変わらなくても、それらの作業は倍になります。

さらに、私の過去30年以上の教員経験の中で、最近の十数年は国際化対応以外にも、ファカルティ・ディベロップメントなど絶えざる授業の改善要請、要望の多くなった学生へ

の対応、増加した競争的研究資金の審査、世界的に増加した査読つきジャーナルのレフェリー業務などのため、研究時間が少なくなっているのを実感しています。日本全体で研究時間の減少と研究力の低下は問題になっているところであり、このままでは教育と研究のトレードオフが鮮明になると危惧されます。私の周りを見る限り、現在は個々の大学教員の高いモチベーションとエフォートで何とかなっているように見受けられますが、これ以上の負担を支えるにはマンパワーを増やすのは必須だと考えます。教員のみならず、職員の役割も非常に重要で、受験から就職に至るまで外国人留学生を支え、日本人学生の海外への送り出しや帰国後のサポートなどを行う職員の貢献は欠かせません。第二次提言によって、今後、予算措置が行われると思いますが、第二次提言を青写真に終わらせないために、全体的に教育の国際化を進める大学について、教員と職員の増員を具体的取組に明記することが重要と考えます。

以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、東原さん。そして、髙橋さん、どうぞ。

○東原構成員　まず、今日の廣津留さんの取組はすごくすばらしいと思うのです。全国にもこういったイベントはあると思うのですけれども、ぜひこういうものを体系化して、できれば小学校、中学校とか、あるいは自治体でこういったイベントを情報提供していく仕掛けは非常に重要ではないかと思います。これは、留学自体は現状では親の収入差によって、情報自体もやはり親の教育に対するマインドというのが結構影響を受けており、優秀な人でも収入差によって情報が得られないところはあるのではないかと思うのです。ですから、能力がある人ならぜひこういったイベントに参加して、どんどん異文化の体験ができる、子供の頃からできるという環境をつくるというのがやはり非常に重要ではないかなと思いますので、この提言には入らないかもしれませんけれども、具現化のところで検討していただければと思います。

この提言自体は非常によくまとまっています。企業側としても相当宿題を与えられたという認識でいます。特に日本の国内においてはまだランゲージのギャップが相当あって、新入社員向けの導入教育からしてまだまだグローバル化が進んでないところがあります。企業に対するコメントも相当入っていますので、企業に向けたアクションをこれから具体化するという方向で進めていきたいと思います。

次に、高校、大学に向けての留学の在り方なのですけれども、これも、企業側としてはトビタテ！留学JAPANを支援するのは当然やっていますが、高校生の数か月の体験が非常に重要だと私は思うので、できるだけ短期間でも提供する数を増やし、その次に大学では長期の留学でディグリーを取るところをやってもらうのが良いと考えており、高校、大学とうまく連携したプログラムがあるといいと思っています。

それから、アジア高校生架け橋プロジェクトみたいなもので、情報交換の場は知っておるのですが、日本に来た留学生の子が困ったときのコミュニケーションをする場がもっと

あったら、コンシェルジュのように質問に行くと思うので、そういった役割を明確にするのも一つ重要ではないかと思います。先ほど申し上げた初等中等教育のところも、海外の留学生の困ったことの相談もそうですけれども、情報を共有する場、コンシェルジュ的なところをきちんと設置するというのが私はお話を聞いていて非常に有効だと思いました。

それと、定量的な数値目標というのを掲げられたところは非常に重要だと思います。工程表と具体化でトレースしていくわけですけれども、なかなか定量的には表現できないような、留学をしてこういう経験でよかったことがどんどんホームページとかに載って、ほかの新しい留学生を誘導できるようなことも、質的な面でももう一工夫あってもいいのかなと思っておりますので、その点は、具現化のところでぜひ御検討をよろしくお願いいたします。

私からは以上です。

○清家座長　ありがとうございました。

では、髙橋さん、どうぞ。

○髙橋構成員　ありがとうございます。

改めて、この第二次提言の素案をまとめていただき、本当にありがとうございます。大変よくまとまっていると思います。

気づいたことを３点挙げます。企業については、例えば就職活動等で不利にならないようにとか、留学生が定着できるようにといったことが書いてあるのですが、企業から社費で留学生を送り出す割合が大きく落ち込んでいるということが大きな問題になっています。企業だけではなく、国家公務員も積極的に留学生として送り出す。その経済的な基盤を支える。それは時間がたてば社会にとって有益なものになるわけですから、そのようなこともここに盛り込めたらよいのではないか。企業がもっと積極的に留学生を送り出すようにという提言は、ここにはなかったのではないか、というのが第一点です。

あと二点だけ。前回のこのワーキング・グループではなく、官邸での会議で申し上げたのですが、例えば19ページのコロナ後の「新たな留学生派遣・受入れ方策」の（１）日本人学生の派遣方策のところから４行目に、「若者の内向き志向や、経済的負担、語学力不足、留年や就職への不安、情報不足などの課題の解決が必要となっている」とあります。若者の内向き志向というのは、経済的負担や語学力不足などが原因となって内向き志向になっているのであって、原因と結果が同列で羅列してあることに違和感を覚えます。経済的負担や情報不足などによってもたらされた若者の内向き志向、というのであれば分かるのですが。

最後に。この第二次提言素案というのは、大学の執行部や教員、職員たちが熟読すると思います。その中には外国籍の教職員も多く含まれています。そういう意味で、この素案自体が、ダイバーシティー・アンド・インクルージョン（D&I）に対してセンシティブな文書であるべきではないかと考えます。これは冒頭でも申し上げたのですが、「我が国」をけん引する、といった表現が何度も出てきます。しかし、日本国籍を持っていない人た

ちも日本の高等教育をけん引する方々になっています。その方たちのお力を借りましょう、というのがこの第二次提言の考え方でもあります。政府の文章ですから「我が国」を使わざるを得ないのかもしれませんが、日本国籍ではない方たちにも高等教育を支える人々になってほしいという提言をしているわけです。「我が国」を「日本」にし、排除される人々ができるだけ少なくなるようなセンシティビティーを、この素案に織り込むべきではないかと思います。

併せて、「親日派・知日派」という言葉が並べて使われることについても、検討会で話し合いました。私たちは教育によって知日派をつくる。親日派をつくることを目的に高等教育を行うのではない。知日派になった後、日本を好むか好まないかは、その個人によるわけですので、親日派をつくりましょうというような形で高等教育の国際化を進めていくものではない、ということを話し合いました。日本で多くの時間を過ごした知日派が結果として親日派になるのであって、親日派をつくるということを目的に掲げると、バランスが悪くなってしまう気がします。とりわけ、この文章は多様性、包摂性という言葉がキーワードになっています。Ｄ＆Ｉに対してセンシティブな言葉遣いをしていくべきではないかと思います。

企業に関しては、社費を使って送り出す留学がなぜこんなに減っているのか。それを上向きにしていかなくてはという提言もこの中に含まれるべきではないかと思いますが、東原構成員、いかがでしょうか。

○東原構成員　徐々にそういう傾向にあるのは認識していまして、髙橋構成員のおっしゃるとおりだと思うのです。今、そういう意味で、留学をもう少し増やそうという動きはしています。一方で、各企業によって違うのですけれども、例えば弊社の場合だと32万人いて、19万人が海外の従業員で、13万人が日本の従業員なのです。そうすると、海外の拠点が相当あって、３年から５年、海外の人財と一緒に生活してビジネスを一緒にやったほうがいいという傾向が強くて、あえて海外現地法人に行ってから大学に通うというケースも増えているのです。ですから、私も以前は34歳のときに１年間留学をしましたが、大分グローバル化が進んでしまって、業務研修や、あるいは長期派遣のような形でその国の文化になじむケースは結構増えてきていて、ピュアに２年間学校へ留学するというのは、Ｒ＆Ｄの人財など限られた人に絞り込まれてきたというのが現状です。でも、いろいろな企業がありますから、おっしゃるように文言として企業の海外留学も増やすように検討、のような一文は入れていいと思いますけれども、いろいろケースは違ってきています。

○清家座長　では、池田さん、よろしくお願いします。

○池田構成員　ありがとうございます。

５分ほどお時間を頂戴して、少しだけ意見を述べさせていただきます。

今日、いろいろな構成の方からもキーワードと言ってもいいぐらい発信といいますか、情報の共有、提供、それから、発信という言葉がいろいろ出てきたかと思います。そこに

これから期待をされているという御意見がたくさんありましたので、リピートになってしまいますが、簡単に申し上げます。

私自身の専門がコミュニケーションなので、少し言葉の使い方、表現にこだわってしまうところがあるのですけれども、この提言の中に、それから、大野構成員の御発言の中にも「予見可能性」という表現が入っていたかと思います。キャリアパスの予見可能性をつくるというのは非常に大事であると。この予見可能性を制度として実際に提供できる、様々な有益なことを提供しているから予見可能性が生まれるということも一つあると思うのですが、学生目線でこの予見可能性という言葉を考えたときに、この国でこの教育を受ければ自分のキャリアはうまくいくかもしれないと期待を込めた上での予見可能性というのもある。そこで、今日、一番最初のほうにどういうふうに留学をより心理的な距離感を縮めてアピールしていくかというところの意見が複数の構成員からあったと思うのですが、いかにポジティブに受け止めてもらえるかというところにつながってくるのだと思います。２つの次元で予見可能性というのを考えていき、戦略的に対応するというのは非常に大事だと思います。制度から、それから、ブランドをつくるというふうに言うと思うのですけれども、実際に行われている制度、取組をうまく伝えることで、それから、理解をしてもらったらよさが分かるというふうに自然に待つのではなくて、分かってもらうまでアピールするというような方法というのでしょうか。そこの取組は非常に大事だと思います。

そのときに大事なのは、共通言語を用いるということだと思います。これは英語を用いましょうと言っているのではなくて、概念の共通という意味での共通言語です。例えば私は留学生の就職支援をしておりますが、そのときに、国際教育の国外の学会などで、今、日本でいかに就職支援に力を入れているかということを話したいと。例えば就職支援というだけでも、ジョブハンディングサポートと言っても伝えたいことが伝わっていないのです。何をしているのかということが分からなければ、日本がいかに頑張っているかも伝わらないということがよくあります。例えば日本語で言いますと、留学生教育。日本で何をやっていますかと言われると私は留学生教育をやっていますと言いますけれども、これをそのまま英語で私はこれこれをやっていますと言っても伝わりません。どういうふうに伝えるのか、なるほど、あなたはこういう分野の人なのと分かってもらえるかというと、エンプロイアビリティーの向上をしていますとか、大学教育からキャリアへのアーティキュレーション、連係の取組をしていますと伝えると、なるほどね、私もやっていますよ、こういう問題が共通していますねと話が進みます。

言葉をすり変えればいいということではなくて、日本がやっていることを対外的にどう理解してもらえるかというところの共通言語というもののなさが日本と国外の距離をつくってしまう要因になっているように少し思うので、ここに意識を持ったような発信、伝え方の意識というのがこの提言をもとに生まれてくるなといいなと思っています。

２点目はコメントになるかもしれませんけれども、この提言のそもそもの育成した人材像というのが非常によく明記されていて、私も賛同するところが多いので、少しだけコメ

ントさせていただきます。

日本人留学生に対する望む人材像の部分と、それから、留学生に求めている人材像の部分で共通項があるというところが今回特徴だと思っています。それは何かといいますと、日本人学生の場合でも、留学生の場合でも、多様な人と協働しながら国際社会や地域社会の発展に資する価値やルールを新しく創出することができる人材という表現が、日本人だけではなく、そして、留学生の人材にも記載されているというところは、非常に評価していいと思っています。特に外国人留学生支援をしていると、キャリア教育一つをとっても、古いという言い方をすると語弊があるかもしれませんけれども、日本の伝統的な企業文化、習慣、慣習に留学生を寄せていく、同化していくというのを暗に示唆するような傾向が今まであったかと思います。私もそこに携わってきていて、いろいろなことを教えてきました。ただ、今回の留学生の育成と日本人の育成の人材像に共通してきているというのはすごく斬新でして、この点を看過せずにこういった人材育成を日本は頑張るのだというのは、今の、特にＺ世代の人間ですね。日本人であろうが、外国人であろうが、国籍は関係ありませんけれども、ここに非常に響くメッセージになっていると思います。私がもし国外でこの第二次提言の説明をするとしたら、まずここはアピールしていくと思います。ここは最初に申し上げたブランドをつくるという意味でももしかしたら関係してくるのかなと思います。

時間があると思いますので、取りあえずここで一旦ストップさせていただきます。ありがとうございました。

○清家座長　もうさらに続けていただかなくて、よろしいですか。

○池田構成員　ほかの方に時間をお譲りしたいと思います。

○清家座長　はい、分かりました。それでは、オンラインから明石さん、お願いいたします。

○明石構成員　明石です。

まずは、事務局のこれまでの極めて丁寧なとりまとめ作業、そのご尽力に深く感謝申し上げます。先生方のお話からも学ぶことが多く、非常に有益なFD研修を受けているような気持ちで毎回伺っておりました。

私からは、細かい点で恐縮ですが１点、それから、別のもう１つ申し上げたいと思います。

細かい点を先に申し上げますと、報告書案の26ページに書いてある具体的取組のところで、ジョイント・ディグリーとダブル・ディグリー、２つ併記されております。戻って18ページのKPIの目指す指標の部分で見ますと、こちらはジョイント・ディグリーに限った言及になっております。私としては、ジョイント・ディグリーやダブル・ディグリーを比べたとき、教育の国際化という観点においては、どちらの優先度が高いとか、どちらの実効性が高いとか、そういうものではないと認識しておりますので、できればKPIのところでも両方に言及したほうが自然なのではないかと思っています。ジョイント・ディグリー、そ

してダブル・ディグリーは、立ち上げる際にはそれなりに苦労を伴いますが、以前も申し上げた通り、日本人の学生の派遣と留学生の受入れ、そして、教育の国際化を同時に体現する制度ですから、今後少しずつでも普及していくことが望ましいと考えています。

２点目です。今後のことですが、工程表に実際の取組に落とし込んでいかれるのだと思います。それに対する大学の受け止めは様々だと予想されます。大学における留学生の受入れという局面に限って申し上げますと、そもそも全学部に占める留学生の割合が相対的に低い大学にとっては、受入れを増やすことは容易ではないわけです。大学の国際交流や国際連携に携われる専門人材やインフラ整備を増やすには追加費用がかかります。一方で、既に留学生を多く受け入れている大学は、比較的容易に数を増やすことが可能なように思われます。教職員の間でも留学生の受入れを含む国際連携の経験、ノウハウが受け継がれて蓄積されているからです。また、受け入れ方は様々で、学部そっくり留学生対応といったスケールメリットを生かしている教育機関もあれば、個別のプログラム、特定の学問領域で少数精鋭で留学生を育てることを得意としている教育組織もあります。振り返りますと、留学生の受入れについては、受入れの数なのか、質なのか、両方なのかといった論点でも、このワーキング・グループでも議論されました。しかし、数にしても、質にしても、受入方法にしても、一律一様に求めるのではなくて、個々の大学の特性、役割、機能に即した適正な戦略が今後打ち出されていくべきだろうと思います。

最後に、マイナスに響くことは申し上げたくないのですが、先ほど、村上先生だと記憶しておりますが、具体的に指摘されていた懸念がありました。つまり、教育と研究のトレードオフ、教職員の業務の負担増の問題で、この懸念については私も100％共有しています。大学のリソースは有限なので、組織の教職員個々人の負担増はずっと続いているところ、この環境が若手研究者や研究者志望の若手にとって大学で働くということの魅力を失わせているのではないか、あるいは既に優秀な研究者を摩耗させてしまっていないか、ということが心配を越えて現実となっている気がします。多くの大学においては、研究時間が深刻なレベルで減少しており、その中で研究力を上げることを至上命題としなければならないという苦しみがあります。もちろん前を向いて仕事をしたいわけですので、大学の現場としては、教育の国際化の推進が研究時間を逼迫するだけではなく、研究力の底上げや有望な人材育成の強化につながるような仕組み、工夫をしていかなければいけないと考えるわけであります。それは常に努めますが、同時に政府関係省庁におかれましては、留学生の受け入れに前向きであり、それを進める明確な意思や戦略がある大学に対しては、今まで以上の後押しをしてほしいと願っているわけであります。

時間の関係でここで終わらせていただきます。ありがとうございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、オンラインから虎山さん、お願いします。

○虎山構成員　ありがとうございます。

手短に述べさせていただきます。

指標のところで、今日もいろいろなところでダイバーシティーが重要だというお話をしていただきました。最初の頭書きのところででもいいのだと思うのですが、日本から行く学生も日本に来る学生の方々も、ぜひいろいろな国から来て欲しい、いろいろな国に行って欲しいというようなことを書いていただいて、進めていただけるといいのではないかなと思いました。いずれにせよ、多分どの国に行ったか、どの国から来たかはトラックされるのだろうと思っています。

そして、もう一つ、具体的方策のところで、何人かの方がおっしゃっていたのですけれども、児童教育みたいなところも重要ですとおっしゃっていました。私も実は中学、高校をアメリカで過ごしているのですけれども、やはりあのときに異文化に触れたというのはすごく重要だったのだろうと思います。そういう意味では、かなり若い頃から、小さい頃から興味を持つ教育をしていただくというのは、具体策の中に何か入っていく方法はないのかなというのがお願いです。多分異文化に早い時期に触れることによって、受容していくというようなことにもつながっていくのではないかと思います。異文化を受容するという両面からこのような取組ができるのではないかと思うので、この辺り、少し検討いただければと思います。

以上です。ありがとうございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、多さん、よろしくお願いします。

○多構成員　ありがとうございます。

本日が第二次提言策定に向けた最後のワーキング・グループということで、こうした政策の根幹に関わる会議体というものに参画させていただきまして、構成員の皆様のお考えをお聞きし、大変勉強になりましたし、自分自身も視野を広げることができたと思っております。ありがとうございました。

このたびお示しいただきました第二次提言の素案でありますが、これまでのワーキング・グループにおいて検討を続けてきた論点整理案といったものを基軸として、具体的な方策がより網羅的に、かつ詳細に記されていると思っております。まずもって、素案の取りまとめに御尽力をいただきましたことに、改めて感謝を申し上げたいと思います。

その上で、２点触れさせていただきます。

まず、素案の25ページでございます。高度外国人材の受入れ促進を目途とした新制度といたしまして、特別高度人材制度及び未来創造人材制度、また、外国人留学生の卒業後の活躍に向けた環境整備といたしまして、在留資格の運用の見直し、具体的には新たな認定制度の創設というものが示されました。この新たな認定制度では、認定を受けた専門学校を卒業する外国人留学生が大学等の卒業者と同等の取扱いとなることから、当該留学生はもとより、受入企業にとっても選択の幅が広がることになると思います。日々留学生と接する者といたしましては、この新たな認定制度の創設というものが、彼らの就労意欲のさらなる向上、そして、企業とのマッチングというものにつながり、ひいては、この素案の

14ページにおいて記されております外国人留学生の活躍する姿というものがあるのですが、その一つの中に日本社会の様々な場面で活躍する専門技術人材と記されております。こうした人材になってくれることを念じてやまない次第であります。

その上で大切なことは、この新たな認定制度が創設に至った際には、国内だけではなく、日本への留学を目指す学生が暮らす国々に対して新制度の周知を徹底していただくことだと思っております。コロナのパンデミックによりまして、長引いた入国制限というものがございました。これによって、日本への留学というものを目指していた外国人は、一時でありましたが、日本の魅力というものを見失いかけていました。その日本がコロナ後の外国人留学生の受入れから卒業後に至るまでの環境整備の一環としてこれだけ大きな運用の見直しを行ったということ、言い換えれば、外国人留学生に大いなる期待をしているということを、各国大使館等を通じてぜひあまねく情報発信、先ほど平原さんからも情報発信というお話があったと思いますが、ぜひこういった周知、情報発信をしていただきたいと思っております。

もう一点だけです。こちらは素案の20ページでございます。外国人留学生の受入れに係る施策を講じる際は、日本の魅力や強みを生かしながら受入れを促進するという趣旨の文面がございました。その魅力や強みというものは、安全性や快適性、清潔さ、伝統文化、食、ポップカルチャーと記されておりますが、その魅力にホスピタリティーというものを加えることはできないかと思っています。いわゆる尊敬であるとか、尊重であるとか、もしくは敬意といったリスペクトの精神に満ちた日本人のホスピタリティーというものこそ、多くの外国人から高く評価をされていることだと思います。勇気と希望を持って海を渡ってくるのが留学生でありまして、このホスピタリティー、面倒見のよさというものは大きな支えになるはずであります。こうしたことから、日本の魅力としてホスピタリティーを加えていただければと思っております。

私からは以上です。ありがとうございました。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、そろそろ時間でございますけれども、池田さん、先ほど少し遠慮されて途中で止められましたが、１分くらいでしたら大丈夫ですから。よろしくお願いします。

○池田構成員　ありがとうございます。

それでは、１分だと収まらないかもしれないのですが、先ほどの大野構成員のところでも出てきました留学生の中の６割の就職というところだけ、もう一つだけあったのです。18ページぐらいにあると思うのですけれども、2018年が48、約５割ということで、今、そこから６割ということで引き上げているのですけれども、この６割というのはちょうど文章の中にもありますけれども、進学する外国人留学生の約６割以上が日本でキャリアを希望しているというところにうまく見合っています。ということは希望する者が国内で自身のキャリアを築くことができるという先ほどの予見可能性もつながるのですけれども、それを現実的にしていこうという指標になっているということで、非常に期待をしていると

ころです。

この６割が国内大学に進学した層を対象とする指標ということで主になっていると思うのですが、留学生の中には中短期で留学してくる学生さんもたくさんおりまして、特に実は欧米諸国とかの学生たちは短期留学、交換留学で来る学生が非常に多くて、その中でも、この３月、４月も私は受入れのキャリアガイダンス、アカデミアガイダンスをしてきましたが、なぜ日本に来たのかと言ったら、日本で働きたいから来たと言ってくれる学生が６人に１人ぐらいの割合で欧米からいました。彼らは交換留学ですから、日本にそのまま定着ができません。いわゆる進学でない留学生層に対しても関心を持つ層に対しての、いわゆる在留資格の問題もありますけれども、いざないというところも忘れてはならないのかなと。

典型的にJETというのがあります。中高、小学校等の英語の先生になるとか、それから、自治体で働くとかというJETというものはあるのですが、例えば今日カナダ大使館に行ってきましたけれども、カナダ全体で約500人しかそこに当てはまらない。国１つで500人は非常に少ないと思いますので、もう少しJET以外にキャリアを日本で考えられるルートというのがつくれないのかなと強く感じるところです。この６割がどういった分野、それから、どういったところでどんなふうに分散されて高度人材に日本になっていくのかというところを、トラッキングも含めて、それから、政策も含めて大いに期待したいというところを申し添えたいと思います。

お時間ありがとうございます。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、時間の制約もございますので、委員の皆様からの意見を伺う時間はここまでといたします。なお、追加的にもし御意見などある場合には、事務局までメール等でお伝えいただければと思います。よろしくお願いいたします。

ここで、オブザーバーとして参加していただいております柴山会長及び浮島本部長から、ここまでの議論についてコメントをいただきたいと思います。

それでは、柴山会長、お願いいたします。

○柴山会長　大変有意義な議論、私もオブザーバーとして参加させていただき、ありがとうございました。

お手元に私が会長を務めます教育・人材力強化調査会の提言を配付させていただきました。こちらに、さっき内向き志向という言葉について取り上げていただいたのですが、日本から海外に行かれる人材については、やはり私どもとしては内向き志向というのが強まってきているなというようなことを感じておりまして、そこからの脱却が一つの大きなテーマになる。そして、逆に海外から日本に来られる方々については、ダイバーシティーのお話もあったのですけれども、欧米ですとかG7の国々も含めて、所得水準が高いところからも日本を選ばれる国にしていくことが極めて重要だということで、副題をつけさせていただいたものでございます。

そして、１ページ目の下から７～８行目に、国際交流の抜本的な強化に向けて高めの目標（KPI）を設定して、その進捗管理を行うことが必要であるということで、具体的な数字は私どもの提言には盛り込まなかったのですけれども、今般、いろいろな形で目標、数値を設定していただいたことは、私は評価をしたいと思います。

質の問題については、進捗管理やKPIというところで言外に言っているとおり、当然、質についても確保して、ゆめゆめ大学の定員の穴埋めということでかき集めるというような性質のものではないというようなことは、私からぜひ強調させていただきたいと思っております。

そして、内向き志向からの脱却というところでいうと、２ページ目に、日本人の海外留学の促進の留学の機運醸成というところからすると、もちろん経済的な限界ということもあるのですけれども、やはり機運の醸成というところからすると、家族の同意ですとか、あるいは英語の先生方の力強い後押し、あるいは指導力強化、こういったことが実は現場において結構大きなハードルであるというようなヒアリングをしておりました。ですので、そこは改善をぜひしていただきたい。

また、語学の問題というのは、海外に人材を派遣するに当たって非常に大きな壁になっている。私も大臣時代に英語の民間試験導入でいろいろとありましたけれども、英語４技能のパフォーマンステストを始めとした、やはり英語のパフォーマンスの強化、また、大学においての論文の引用件数を基準とした教員採用方針とか、そういったインセンティブをつけることによって、また、初等中等段階からも語学教育を強化するということによって、こういった壁をぜひ乗り越えていただきたいということでございます。

今回の提言の派遣の部分について若干不満に思ったのは、私どもの提言でいうと、今の留学促進の経済面のバックアップのところに基金の設立という文言を実は私どもは使わせていただいておりまして、もしかすると、政府部内で基金という言葉ですとか、あるいは給付型の奨学金とか、あまり大胆なことはちゅうちょされたのかもしれませんけれども、私はこの経済的な支援というのは非常に重要なポイントであると思っておりますので、ここはやはりそういった形の経済支援というのはぜひしっかりとしていただきたいなと思っております。

それから、逆に受入れのことについてなのですけれども、先ほど来、いろいろと優秀な頭脳の受入れのためには、例えば大学における在留資格の柔軟化というところ、こういったことも私は非常に重要なポイントであろうと思っておりますし、また、さっき交換留学生のお話もあったのですが、やはり先端人材の大幅な受入れについては、こういったギブアンドテイクの仕組みというものをしっかりと拡大していくというのは、やはり非常に重要なポイントだろうと。私も大いに賛同させていただくところでもございます。

ということで、受入れについては、今日この後、浮島先生も御発言されますけれども、我々、超党派で~~日本教育~~日本語教育の推進ということを、質を伴う形で今国会の法案にかかっておりますけれども、しっかりと進めて、そういったインフラも進めていきたいと思

っていますし、それから、ここにも書かれていることなのですけれども、受入れについても、派遣についても、やはり大学の事務部がしっかりとしたそういった前さばきをできるような環境を行っていく。選考手続におけるペーパーレス化やオンライン活用とか、手続の柔軟化ということが今回示された第二次提言の21ページに書かれておりましたけれども、そういったインフラが実は結構重要なポイントであろうと私は思っています。これは今申し上げたように、受入れもそうですけれども、留学生を派遣するときも、こういった必要書類を、英語でやはり応募させるわけですから、窓口への人員配置に英語でドキュメントを作れるような、そういう仕組みというのは、留学経験者を担当させるとか、そういう必要があると私は思っていますから、そこはしっかりと整えていただきたいなと思っております。

本当に皆様、ありがとうございました。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、浮島本部長、お願いいたします。

○浮島本部長　本日も大変に御苦労さまでございます。また、この議論に参加させていただきましたこと、心から感謝を申し上げさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

今回のこの留学生の議論につきましては、本当に文部科学省をはじめ、各関係省庁がしっかりと勉強してまとめていただいたと思っておりますけれども、この取組がさらに進められるように対応させていただきたいと思います。

私もたくさんの留学生と話をするのですけれども、海外から来る留学生の多くが、日本のアニメや漫画、あるいは映画、あるいは伝統文化、芸術を好きになって日本に来た、それがきっかけになったということを数多く伺っているところでございます。

そんな中でお願いなのですけれども、留学生が日本に来て大学や専門学校で学んだ後に、どのようにその後生かされていくかということがとても重要な視点だと私は思ってきているということがありますので、ここがしっかりと文科省をはじめ、各関係省庁が連携をしながら、現場目線で留学生の学び、就職、また、帰国後の活動等にしっかりと進んでいけるように、全体となってそこも進めていただきたいと、まず大臣のほうにもお願いを今日はさせていただきたいと思います。

その上で、私のほうから２点だけお願いがありました。

まず、日本人学生の派遣の促進なのですけれども、19ページにもあります具体的取組の中に、若手芸術家の海外研修に対する支援を充実するという文言があります。世界の文化、芸術の舞台で活躍するためにも、これ自体は非常に重要だと思いますけれども、もっと具体的な取組になるような検討をしていただきたいと思います。また、現在、文化庁でも若手芸術家の人材の派遣の事業が行われておりますけれども、その前の段階の芸術大学に在学するような学生が在学中に留学できるような仕組みを具体化していただきたいとお願いをさせていただきたいと思います。

もう一点は、外国人留学生の受入れですけれども、我が国にとって科学技術の分野でしっかりと優秀な学生を受け入れることは非常に重要ですが、ソフトパワーとして文化や芸術、スポーツ分野でも留学生を受け入れることも私は非常に重要なことだと思っております。

実は、先月ですけれども、ばらばらだったのですが、４人の海外に住んでいる日本人の方々、建築家だったり、アーティストだったり、様々な方でしたけれども、私もお会いしたことはなかったのですが、ニューヨークからボストンからカナダから訪ねてきていただきました。そして、彼らが言ったのは、何で日本人は日本の伝統文化、芸術というのをもっとしっかりと見てくれないのかと。海外に住んでいると、日本の伝統文化、芸術はすばらしい。日本に学びに行きたい、留学したいのだけれども、学ぶ場所がない。また、どうやって探したらいいかも分からない。それで、彼らいわく、アメリカで活躍している日本人の方々だけで集まって、日本人の学生を支援したいということで、基金を米ドルでつくったらしいのです。それで、みんないろいろなところに留学して、いろいろな交流をしてくださいということで話をしていた。それで、みんなで集まってぱっと蓋を開けたら、日本人の留学生は誰も使ってくれていない。使っていたのは中国人の留学生だったのです。

それで、彼らはそのことで私に伝えにきてくれたのですけれども、我々は海外に住んでいても日本人である。日本人の学生をいっぱい勉強させたい。それと同時に、海外にいると、日本の伝統文化、芸術、アニメや漫画、そういうものを日本に行って留学して学びたいという学生が相当数いる。でも、その交流が全くできていないのがとても残念であるということで、その彼らから私に宿題をいただいたのが、日本の留学生を支援したいと。トビタテ！留学JAPANというのもあるけれども、もっと支援をしたい。我々はお金に糸目はつけませんと。それで、一人の女性は個人だったのですけれども、申し訳ないです。私、個人だから、そんなに寄附することはできないのですけれども、年間２億させていただきますとさらっと言うのです。私たちは海外で活躍している日本人で、日本人の学生を応援したい、海外に行こうといろいろなあれをしたいと言って、ドル仕立ての応援する方法を何か考えてもらいたいという大きな宿題をいただいたところでございまして、文科省とも今いろいろお話をさせていただいているところでございますけれども、海外に住んでいる日本人の活躍している方々もしっかりと、奨学金の件もそうですけれども、国だけではなくて巻き込んでいくということも重要だなということを今回海外の日本人の方から教えていただきました。

あと、この20ページの外国人留学生の受入れと22ページにある国際交流の推進のところになるのですけれども、文化、芸術という文言が見受けられないので、しっかりとそういうところも視野に入れていただきたいというのと、各教育関係の機関にお任せではなくて、しっかり国としてもいわゆる魅力ある受け入れる環境をつくることが必要だと思います。

また、このモデル事業とかコンソーシアムをつくって、受入れのための情報発信なども文化庁や文科省、また、外務省等と連携をしてやっていただきたいと思っております。

23ページには、国際交流の推進において農業を学ぶ学生等がという文言が上がっているのですけれども、日本のソフトパワーの強みを生かした文化、芸術分野での交流というのも提言に入れていただけたらと思いますので、お願いをさせていただきたいと思います。

本日は大変ありがとうございました。

○清家座長　ありがとうございました。

それでは、最後に永岡大臣から御挨拶をいただきたいと存じますが、その前にプレスの入室をお願いいたします。

（報道関係者入室）

○清家座長　それでは、永岡大臣、よろしくお願いいたします。

○永岡大臣　永岡桂子でございます。

本当に構成の皆様方におかれましては、お忙しい中、こうやってワーキング・グループに御参加をいただきまして、誠にありがとうございました。

今、長時間にわたりましたけれども、構成員の皆様方の御意見も多岐にわたり、また、前向きなものばかりで、私も話を聞きながら、大変胸がわくわくどきどき、そして、私も留学したかったという思いもせざるを得ないと。そういうことを感じた次第でございます。

本来ですと、廣津留先生とか平原先生、サマーキャンプのことから、また、やはり日本の広報が不足していると。これは相当大きなダメージでございますので、何とかしなければと思います。これは日本に留学したい人も、また、日本から海外に留学したい人にもよくない。絶対にまずはこれをやらなければと感じさせていただきましたし、やはり給付型の奨学金、これはどちらも同じですけれども、日本から海外に行きたい人も、それから、海外から日本に行きたい人も非常に重要なことだと思いましたし、また、特に日本は同調圧力が強いというようなことがあります。ですから、海外に行けばそういう多様な人たちがいるのだということをまずは体をもって実感することができるわけですよね。日本で誰に教えてもらわなくても、海外でいろいろな体験をして、そして、浮島先生がおっしゃるように、日本の文化もどれだけすばらしいものかということを日本から海外に留学する人は感じられるはずでございます。

実は私も海外に留学したかったのですけれども、こんな話をずっとしていていいですかね。実は４人きょうだい、私は長女、母に言いました。高校生のときです。その案内というのは、高校の廊下に貼ってあった案内書だけでした。行きたいと言ったら、駄目よ、高校生なのだから。２番目、私の妹も言いました。駄目よ、まだ早いわ。そして、３番目の妹が言いました。あら、これはみんな言うんだ。留学したいと言うんだということで、３番目は頑張って高校生のときに１年行ってしまいました。そして、４番目の弟になりますが、もう彼は言わなくても行かせてもらえたというのが昔の私の体験でございます。そんな中で、若いときに留学をしたら、どれだけその人の人生が変わるのかなという期待も込めまして、今日の先生方のお話を聞かせていただいたというのが私の見解でございます。

先月の教育未来創造会議におきまして、岸田総理より、コロナ後のグローバル社会を見

据えました人への投資の具体化に向けて、４月中に提言を取りまとめるように御指示がございました。そのために、本日は第二次提言の素案につきまして、これまでの皆様方の御意見を踏まえまして、事務局として整理したものをお示しさせていただいたわけでございます。これまで有識者の皆様から本当に活発な御議論をいただいたことに感謝を申し上げます。

新しい資本主義を実現するためには、人への投資を一層進めることが重要であると思っておりますし、また、海外に挑戦することができるような経済的支援の充実を図ることが大変重要だと思っております。

皆様方におかれましては、４月中の第二次提言の取りまとめに向けまして頑張っていただきますので、これからも引き続きましての御協力のほど、ぜひよろしくお願い申し上げます。

本日はありがとうございます。

○清家座長　どうもありがとうございました。

それでは、恐縮ですがプレスの方はこれで御退室をお願いいたします。

（報道関係者退室）

○清家座長　ありがとうございました。

今日は少し時間を超過してしまいまして、申し訳ございません。これで本日の会議は終了といたします。

なお、第二次提言案につきましては、座長一任とさせていただき、本日の議論及び政府内での検討を反映させた上で、親会議において、ワーキング・グループにおいて取りまとめた案として提示させていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ワーキング・グループは今回で終了でございます。活発な御議論を誠にありがとうございました。

次回以降につきましては、事務局より御説明をしていただきます。

○瀧本担当室長　失礼いたします。

次回は、構成員の皆様には事前に御案内しておりますが、４月21日木曜日の16時から16時55分、この日程は前日まで対外秘という扱いでお願いをしておりますけれども、官邸にて親会議を開催させていただきます。詳細については追って御連絡をさせていただきます。

事務局からは以上です。

○清家座長　それでは、皆様、どうもありがとうございました。